

二次元ぷち文庫

聖海の巫女

夕風時乃

ゆう なぎ とき の

高岡智空

表紙イラスト：舞猫ルル

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『聖海の巫女 夕凧時乃』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



聖海の巫女
夕風時乃
ゆうなぎときの

高岡智空
表紙 / 舞猫ルル

登場人物紹介

Characters

ゆうなぎときの
夕風時乃

海神の住まう海を見守る、あまなだ蒼灘神社の巫女。黒髪で少女らしい容姿。

青く澄み、遠く広がり、どこまでも光り輝く、鏡面のような水面——。

古来その島——ミブチ島から望める景観は、海神の治める領域としていかなる人間の立ち入りも許さず、ただ自然のままにその姿を残していた。

地元の人間は言うに及ばず、余所者であつても余程の不心得者でなければ、その海域に足を踏み入れたりはしない。

神の領域を侵す者には神罰が下る——と。

そんな言い伝えが残り、なによりも不心得者が辿つた結末を目の当たりにしたことで、海神に対する畏敬の念を絶やさなかつたからだ。それはこの島において、科学の発達した現代になつても変わらない信仰である。

「——本当に、美しい……」

そうして今日も変わらぬ海の姿を見つめ、少女は自然と感嘆の言葉をもらす。

一人の人間にとつては広大な海をなんなく治め、その恵みを人々に分け与えてくださる神への感謝と崇拜が、その言葉を紡がせたのだ。そしてそんな神に仕えることのできる自分には、なによりも幸せだと実感している。

そう——彼女は神に仕え、この海を守ることを人の身で許された、あおなだ蒼灘神社の当代巫女

だつた。

「和津御様わつづみ、本日もどうかこの夕風時乃にご加護を……神域を守る許しを、お与えください

「いませ」

「恐れ多きに声を震わせながら神の名を、それに続けて神に捧げた己の名を口にし、少女は襦袢じゆばんの上から清水を浴びた。

「つつ……あ……んっ……」

パシヤンツ、と水の跳ねる音が石畳に響く。初夏とはいえ早朝の気候は涼しく、冷たく濡れた薄着物の感触に、少しだけ身震いしてしまう。けれどこれは、一日の神事を始めるにあたって外せない習わしであり、身を清めるための禊みそぎなのだ。十数年、冬でも欠かさず行い、いまは亡き父に身体を心配されてもやめなかつた行為だけに、もうその冷たさにもすっかり慣れている。

これは、そう——ただ反射的に身体が震えただけだ。

(……これではいけませんね、神に対して言い訳をするなど……)

自身を戒めつつ、乾いた布を襦袢に宛がい、水気を吸い取る。

ぴったりと肌に吸いつく薄絹の下、透けて見える肌は陶磁器のように白く、そしてその肢体はみつともない贅肉など僅かにもついていない、華奢な細軀だった。

この現代において、時乃ほどの年齢であればもう少し身長もあり、手足も長くしなやかで、大人の男性がつかいにくい色香に迷ってしまうほどに成熟していることさえある。だが、時乃の身体はその平均値を大きく下回っているのは明らかだった。

抱くと手折れてしまいそうな細い腰と薄い胸板、それに相応しい低身長。そしてなにより、神聖な清らかささえ覚える、謙虚な膨らみを湛えた慎ましい乳房は、年齢をいくつも下に見られるほどに幼さを感じさせていた。

(……これですから、土地の方々にも威厳を感じていただけなのでしょうか……)
ここ数年、そう悩み続けている時乃だが、彼女が幼く見られてしまうのは身体の成長ばかりが原因ではない。

丸く大きく、けれど漆黒の宝玉のようにキラキラと淡い光を放つ瞳も、細い花びらを置いただけのような可憐な唇も、やや丸みを帯びた可愛らしい輪郭の線も。それらの作りだす童顔もまた、時乃の若々しい印象を強くしてしまっていた。

肩口で切り揃え、前髪は眉の辺りで整えた髪型も原因の一つである。とはいえ、長く伸ばした髪が参道や神殿に落ち、それに気づかぬことがあれば祀る神の威光をも傷つけてしまいかねない。そんな心配から時乃は、少し伸びれば髪を手入れし、この童わらわのような髪型をもう数年も守っているのだ。

ただそのかいあってか、この国に住まう者特有の美しい黒髪は、根元から先端に至るまで見事に艶を保つことができていた。陽光を浴びれば反射する光が頭の鉢で冠を作り、その辺りなどは彼女の神聖さを高める要因となっている。

「いいえ、ないものねだりをしたとて、どうにもなりませんし……」

それでも、やはり得られるものなら欲しかったため息をもらしつつ、ある程度の水気を吸い取った襦袢を脱ぐため社務所の奥、浴場のほうへ向かう。

脱衣所には当然、鏡がある。意図したわけではないが、その前で襦袢をはだけると、やはりコンプレックスである若い肢体が映しだされた。本当にい、ともすれば上がったばかりの中学生と間違われかねないような体型だ。

自分の片手でも包んでしまえそうな乳房は、色素の薄い肌の膨らみに、ほんのり色づいた薄い桜色の乳首がチョンと乗せられている。クルリと身体を回すと、たしかに括れた腰ではあるが、やはり子供のようで頼りなく思えてしまう。濡れた襦袢に透けたヒップは、ツンと布地を押し上げる形の良さではあるが、全体的にポリウムに乏しく、将来は子を産むという役目を考えると、いささか不安に感じられた。

ただ——肌のハリに関して言えば年上の女性はもちろん、手入れを疎かにする同年代よりは遥かに瑞々しく、艶も弾力も最上級であるのは間違いないのだが、比べたこともない時乃にそのようなことを知る術はない。理想と異なる体型に憂いのため息を吐いて、仕事着である巫女装束に着替えることしかできなかった。



巫女の一日は早く、長く、そして多忙だ。

先ほどの早朝起床からの禊、そして清潔な衣装に着替えて神殿の清掃、参道の掃除、そ

9

の他の雑務などを執り行う。しかしこの蒼灘神社においてはもう一つ重要な神事——すなわち、神に代わって海を見守るといふ大事な役目があった。

もちろん、見守るといっても、ただ黙って眺めていればいいというわけではない。

「……このようなゴミが、いったいどこから流れ着くのでしょうか……」

海辺を歩き、ゴミ袋と火バサミを手にして、浜に流れ着いたゴミを拾い集めてゆく。ここから見える海は船での立ち入りは禁止、さらに海水浴も禁止なのだから、浜辺には一切のゴミが発生しない。けれどどこかから海に落ちたゴミは潮の流れに逆らえず、こうして漂着してくることが多かつた。

そのほとんどは袋や缶、それにビンなどの食品関係のゴミであり、中には油の付着していたものも存在する。それらの油が海に浮かんでいるのを見ると、たまらなく不快に、そして悲しくなるのだ。

（申し訳ありません、和津御様……御身の化身ともいえる海を穢してしまい……）

目に見える範囲の汚れは、なんとか海水ごと掬って引き上げることができるとは、たとえ巫女であつても儀式を済ませなければ海に入れないのだ。手の届かないところで、時乃を嘲笑うように汚れが浮かんでいるのを見ると、小さな手が怒りにキュッと結ばれた。

「ふう……ともかく、いったんこのゴミを捨てに戻りましょう。それから、海の汚れをもう一度清めなければなりませんし……あら？」

「え、ええ……んうつ、これは、とて、もお……おつ、はつ……ひゃあんつ……」

背中が撫でられ、跳ね上がった瞬間に、身体の前に滑り込んだ手が太ももの内側に触れてきた。あつ、と思つたときにはもう遅く、それまでとはうつて変わった力強い動きで、足が左右に開かれてしまう。

「そ、そこは……あうつ、んつ……くふうう……」

『こちら、汗の感触が残っておりますわ……こうして、念入りに洗いまししょうね』

足の付け根から、手の平全体を使って膝に向けてお湯が引き伸ばされる。ザワザワと奇妙な感覚が、足から下腹部に、そして背筋を這い上がって頭の奥に響いてくるようだった。だがそれでも、まるで抵抗できない身体は女性らの手に翻弄され、左右から太ももを擦られていくというのに、ビクビクと腰を躍らせることしかできない。

——ヌルルウウ……クチュツ、チュルウウツ……グチュツ、ヌリュウツ……

「はひゅつ、んつ、ふあつ……はつ、あああ……こ、これは、まこ、とにい……あ、あらつている、だけ、で……」

『ええ、こうして洗うのが人間の身には心地よいと、古来伝え聞いております』

『そして、次の儀式のためにも……ここは奥の奥まで、綺麗にしておかねばなりませんの……さ、力をお抜きになられて……うふふ』

相変わらず、耳朵を打つ熱い吐息に首筋が粟立ってゆく。そうしながら、いつしか腕は

彼女らの乳房でニユルニユルと扱かれる。指先、腋への洗浄も手を抜かないでいながら、片手はほぼ常に、太ももと内股を擦って、その指は時乃の大切な部分に掠っていた。

（んあつ、あああ……い、けませ……ん……はふつ、はつ……そこ、はあ……）

微かに頭でそう思うのだが、湯気の充満する浴場で茹つてしまったのか、どうしてだめなのか、その考えがまとまってくれない。その間も女性らからのささやきが、ジンと脳髓を痺れさせ、この行為を受け入れると命じられる。

——これは身体を洗っているのだから、局部に触れるのは仕方がない。

——儀式を行うために、抵抗はしないほうがいい。

（ん……そ、そう、なのです……ね……これは、儀式の、ため……んあ、はうう……）

細くしなやかな女性の指が、ニユルリとお湯を絡めて、秘唇の縁をなぞっていった。不意の感触に下腹部からビリリッと強い刺激が走り、思わず肩を跳ねさせた瞬間、強く腕を抱き締められる。

「ふはつ……ふやつ、ひゃううん……」

温かな感触と柔らかな包み込みが、肌から安心感を与えて、腕が脱力する。すると力の抜けたところで、またも左右から伸びる指が股間を這い、新たなお湯をヌルヌルと擦りつけてきた。

「ああつ、はああん……んつ、くつ……ふあつ、ふああ……」

二度、三度と掠るだけの感触だったのに、たまらず時乃は腰を動かしてしまふ。だがその瞬間、自分がなにをしたのかに思い至り、慌てて腰を引こうとする。

(んっ……な、なにをしているのです、わたくしはっ……あうっ、んううっ!?)

けれど——そんな時乃の反応を待っていたように、女たちの指がヌルリと滑り込んで、閉ざされていた秘唇をこじ開けんばかりに強く、指の腹を押しつけてきた。

「くひあああつっ！ はっ、んなつ、なん、で、すっ……ううっ！ い、いまのっ、は……はあつ、あああつ！」

戸惑い、そして問いかけるように口を開いても、彼女たちから答えはなかった。ただこちらの反応を見てクスクスと低く笑いながら、彼女らの指はグツグツと肉華を左右に押し開いて、その奥の潤んだ肉壁を、指先で擦り上げる。

「ふあっ……んあつ、あつ、だめ、です……ううっ、そ、そのような、場所……」

『あら、いかなさいましたか、時乃様』

『お人の身では、この部分は一段と汚れがひどいと聞いておりますので、その分しっかりと磨かせていただきますわ……ほおら、このようにして……』

風呂桶に汲まれた大量のお湯が、それもさらに粘度の増した掴めるほどに濃厚なお湯が股間に注がれ、二人の手によつてグチュグチュと掻き混ぜられる。

(あううううっ……い、いや、ですっ……このような、あああ……)

限界まで開脚した脚の奥、他人に秘すべき部分を、よりにもよって神の使いの手で洗われるという恥辱に、顔を覆い隠してしまいたくなる。だがその両手は二人に捉えられ、何度となく擦られた腋と脇腹から伝わる甘痺れによつて、完全に力が入らなくなつていた。

——グチユウウウウ……ニチユツ、ズリユツ、グチユツ、クチユウウ……

泥遊びでよく聞こえるような、くぐもつた水音が股間から響き、開かれた秘部の粘膜がお湯を潤滑油に指で擦られ、這い上がる刺激に腰が跳ねてしまふ。

「はふつ……んっ、んううつ……うつ……くあああつ！ あうつ、ふううつ……」

せめて声は押し殺そうと唇を噛んでも、左右から女性はこちらの顔を覗き込み、その反応を見ながら手の動きを変えているように思えた。そんな馬鹿な、彼女らはただ洗つているだけ——そのはずなのに、時乃が思わず心地よさに眉を跳ねさせ、表情を緩めてしまふと、そうなつた原因を狙つて、カレイとヒラメの指が蠢いてゆく。

ヌリユリユツと指先が音を奏で、楽器でも操るように淫肉を擦り、あくまでも優しく丁寧に摩擦刺激を送り込んできた。その絶妙な刺激に腰は震えつばなしで、さらには全身までがその部分と同じくらい敏感にさせられるようだった。

股間だけでなく、お尻を触られ——いや、洗われたり、またも腋を擦られたりするだけで背筋が痺れ、不自由な拘束状態でビクビクと身体中が躍つてしまふ。

（ああっ、あつ……いい、やですうっ……んはっ、はあああつっ！ こ、これでは、まるで

……まる、でえ……ああ、わ、わたくしい……んくうっ！)

まだ母が生きていた頃、学校で教わった知識の補完として、そういう行為を教えられたことがあった。蒼灘神社の女として、将来は子を為さねばならない必要性からだ。

だがもちろん、それは知識としてだけで、実践も手ほどきもされてはいない。そんな目にしたこともない行為だが、いま受けている感覚が、そういう行為——いわゆる性行為にて得られる感覚だというのが、時乃は知識と本能で理解できていた。

(つつ……い、いいえ、そのようなっ……神の使いの手で、身を清められているだけなのに……わたくしは、そんなふしだらな女では……っ)

必死に唇を引き締めて、鼻から荒い息を吐いて、込み上げる感覚から意識を遠ざけようとする。だがその耳元に化身の唇が、今度は間違いではなくはつきりと触れて、みみたぶ耳朶を甘く噛み擦りながらささやきかけた。

『はむっ……んっ、いかがなさいましたか、時乃様あ……』

「ふあううつつ……んっ、な、なん、でも……あ、ありま、せっ……んうつつ……」

『んふふ、そうですね……洗われているだけで、淫らな心地になられたのでは……主様も、落胆なされるでしょうから……』

左右から響く甘い声、その内容にビクンツと肩が跳ねる。そう、このあとで待っているのは和津御様との謁見なのだ。それを前にして、はしたない感情を抱えておくわけにはい

かない。

（た……耐え、なさい、時乃っ……このような、ことくらいで……はふっ、ふああ……）
ツルツルと尾てい骨をなぞられ、お尻が揉みしだかれる。それだけではなく、お腹や腕や足や、胸の慎ましい膨らみも撫でるように洗われ、全身が奇妙な感情で張り裂けてしま
いそうだった。だが、それでも――。

『――さて、これでお仕舞いですわ。お疲れ様でした、時乃様……さ、お立ちになつて』
「はあ、はああ……はあつ、え、ええ……んっ、くうう……んはっ、ふっ……」

息も絶え絶えという様子で全身を震わせながらも、時乃はなんとか冷静な感情を保ち、
足腰をガクガクとさせて立ち上がる。

『平気でございますか、時乃様……ふふっ』

「んひっっ――ひあうううっ?! んっ、あつ……へ、平気、れふ……ううっ……」

お尻を支えられた瞬間、目の眩むような刺激に思いきり背中が仰け反る。露骨な反応を
見せて羞恥を覚えつつ、なんとか答えた時乃は、彼女らに手を取られて奥の扉へ向かうこ
とになった。



扉を抜けた先は、簡単な着衣場になっていた。濡れた身体を拭くだけでも身体を跳ねさ
せてしまい、羞恥を味わわされた身に薄い襦袢一枚を羽織らされ、時乃はその先へと歩み

を進める。それでも、自分の意思で歩くことはほとんどなく、遣いのカレイとヒラメに手を取られ、肩を抱かれ、背中を押されて歩くことを促されていたが。

『身を清められましたあとは、身支度を整えませんか……さ、時乃様……』

「え、ええ……んっ、はひゅう……」

お風呂で弛緩しすぎたせいか、お尻の肉がいつも膨らみ、敏感になった気がする。化身の手によつて押され、弾力を確かめるようにムニムニと揉まれてしまうと、喉奥から溢れるはしたない声をこらえきれなかった。

（はんっ、んああ……わ、わたくし、いきたい……どうしてっ……）

スルツ、スルルツと指の腹で尻肉を突かれ、押し込まれながら撫でられ、背中が弾かれたように跳ねる。膝も震えつばなしで、歩くのさえ満足にできないでいた。

それでもなんとか辿り着いたのは、鏡や寝台、椅子などが並べられた化粧室のような場所だった。さらには別の化身たちも待機しており、恭しく手を取られた時乃は寝台に横たえられ、瞳を閉じさせられた。

「あ、あの、いったいなにを……謁見の身支度を、行うのでは……んっ」

『ええ、その通りです。ですからこの……主様より賜りし、聖水を塗り込めさせていただきますわ。地上で言う、美容液のようなものでもありませんから……お風呂上がりを使うとより身体に浸透し、主様の求められる身体になれましょう……』

「そう、なのですか……はうつ、んあつ……あ、では……お願い、いたします……」

お試しとばかりに、女性の一人が時乃の手の平にその聖水を垂らし、又チャリと音を立てて塗り広げた。ヒヤリとした感触が火照った身体に心地よく、先ほどのお湯に似た感触だったために、深く考えず——いや、考えられず、時乃は了承していた。

だが次の瞬間、それを塗りつける彼女らの動きに、思わず声の上擦ってしまう。

『では、失礼して……んぐつ、んぷう……んふふ、ほえれは、いきまふう……』

『じゅるるるつ……んふふ、れえるつ……じゅる、れりゅうう……』

『ぐぶつ、じゅつ……れろおおおつ、じゅろつ、じゅるうう……』

『んきひいっつ!! あいつ、ひつ……ひやつ、な、なにをつ……んやああつ!』

瞳を開いた時乃は仰天した。見れば数人の魚の化身たちは、その聖水とやらを口に含み、唇を身体に押しつけて舌を伸ばし、レロレロと全身を舐め回そうとしているのだ。

「やつ、やめてっ……おやめください! それにつ、せつかくの聖水をそのようにしては……わ、和津御様の、お力が……っ」

『んふふ、心配はご無用ですわ……私たちの口は人のものと違い、完全な無菌状態……それどころか、いくばくか主様の力を秘めておりますから……』

『こうすることで、さらに聖水が濃縮され、時乃様の御身に染み込みますの……じゅろおお……れりゅつ、じゅるるるつ……』

扱かれるだけで気が狂いそうなほど強烈な快感を訴えてくる。

——グチュニユウウウウツ、グブツ、ジュブジュブツ、ジュルウウウウツ！
「いぎひいいいい——つつつ!? あひつ、ひいいいつ、んひいいいつつ！」

キツく締まった軟体穴が蠢動し、指先で弾くような刺激を送り込むとともに、唇で吸い立てる何倍もの強さでねぶり、どこまでも甘く噛み扱いてくる。一瞬にして目先に火花が飛び散り、拘束を振り払わんばかりの激しさで、時乃は細腰をガクガクと痙攣させてしまった。チュウツ、チュウツと張りついた吸盤の吸いつく音が聞こえるたびに、胸から注がれる電流甘刺激が膣肉に響き、気がつくど股間を突き上げて高らかに叫んでいた。

「きひつつつ、あひいいいい——つつつ!! んいつ、イクツ、いひゆつつ、イクううううつつつ! イクイクツ、んああああ——つつ! イクううううんつつつ!」

気を失うほどイソギンチャクにイカされたときに、魚の化身たちに何度も強要された敗北の宣言が、肉体の快楽とともにしつかりと覚え込まされていた。大きく身を仰け反らせ、ピンと張り詰めさせた両脚の間からプシュウウツツ! と夥しい量の熱蜜を噴出し、時乃は頭の中を真っ白に染めて絶頂を訴え続ける。

(んくあああつつつ、あひやつ、ひゃ、めつつ……らめつ、だめつ、らめえええつつ! あぐううつ、イツ……イ、ぐつつ、ううううんつ……イクツ、あああつ、イクううつ!)

絶頂によってますます敏感に、そして硬くそそり立った乳首が扱かれ、それまで以上の

肉悦が迸り、絶え間ない絶頂の波が全身に広がってゆく。膣奥を潤ませ、媚肉をドロドロに蕩かした熱い愛液は膣口から噴き続け、ミブチとの謁見の間にいくつもの水たまりと染みを作ってしまう。

「んぐくううつつ、あふつ、ふああつ！ あつ……あああつ、んはああつ！」

もはや身体中、どこを触つてもすぐにイカされてしまうほど、肌という肌が性感帯に作り変えられたようだった。だがそれでも、ある一箇所だけが異常なまでに重苦しく疼きを発し、いまだ触れられないもどかしさで、四肢がブルブルと震えてくる。

（そんな、なつ……はつ、あうううつ……んつ、んひいつ……ひつ、ぐつ……こ、股間……）

太ももの付け根付近まで触手が絡み、無毛になった淫部の付近に細長い触手が這い回っている感触が背筋を伝う。なのに、どうしてもその部分には触れられず、緩みきった淫部からは接触を求めるように、プピユツ、ビュルウウツとはしたくない淫液が噴きこぼれた。

『アワテルナ、コレカラタツプリトオカシテヤル……オレノコヲハラムガイイ……』

（つつ……いま、なんとつ……んくつ、ひあああつつつ!!）

脳内に響いた邪神の言葉に反応するが、その直後に訪れた甘い快樂に、すぐさま思考が蕩けてしまう。時乃の腕ほどはあろうという、ゴツゴツとした野太い触手が先端を淫唇に添え、広がった媚粘膜をクチュクチュと撫で上げてきた。

「あくふううんつつ！ んあつ、だ、め……です、のっ……ほおつつつ！」

振られた触手が淫涎の溢れる膣口を突つき、あっけなく緩んだ肉の壁を、グジュグジュと掘り開いてゆく。だがあくまで入口を大きくするだけの、浅い挿入——それでも、時乃の食欲に熟れてしまった膣肉は硬い感触にゾクゾクと痺れを放ち、肉襞の合間から熱々の蜜汁を垂れ溢れさせてしまう。

（なん、れ、れふのお……んくつ、ふああ……あつ、さ、触られ、た、らけ……れ……）

『キサマノニクガ、オレゴノミノアナニカワツテキタツイウコトダ……』

邪神のささやきにゾクリと寒気が走る。だが同時に、清廉だった肉体を淫らに作り変えられた背徳感が、頭の奥に否定できない快楽を流し込み、キュンツと子宮の奥が震え、触手に擦れる媚粘膜がわなないてゆく。

「んひあああつ……あうつ、んそつ、そん、らああ……はひいっつ！」

溢れる粘液を絡め取り、触手と膣肉の両方に馴染ませるように、ゆつくりと膣口で抽挿を繰り返す邪神の動きに、背筋が大きく跳ねてしまった。その間にも、尻肉にいくつもの吸盤跡が刻まれ、腋下を触手粘蜜に舐め擦られ、乳首が何倍にも膨らむほどに吸い立てられる。張りつけのように四肢を開いた肢体がビクンツツと痙攣し、思考はどんどん快感の色に染め抜かれていった。

『イタダクゾ、ワヅミノミコノニク……キャツヲウツヘイヲ、ワガコヲハラメ……』

(んあうっ、ま、まはっ、その、よう……にや、はっ……ふあああつっ！)

魚の化身が口にし、邪神が幾度もそう告げてきたことを裏付けるように、今度こそはつきりと、ミブチは時乃の頭の中に語りかけてきた。和津御の巫女の肉を奪い、和津御を討つ兵を孕ませる——と。

(その、よう、な……ころ、に、ひっ……な、なりやな、はああっ……)

敬愛し、畏怖し、曇ることない信仰を捧げる神を討つための手勢を孕まされるなど、巫女として最大の侮辱だ。そしてこのような異形の子を孕むなど、女としても考えたくはない最低の恥辱である。それなのに——。

「あぐっ、んっ、ひっ……いひああああっ、あうっ、あんっ……はああんっつっ！」

ズブツ、ニュープウウウツと潤んだ肉が開墜され、狭まった粘膜を裂くように押し開かれて、時乃は歓喜の嬌声を吐きだしてしまった。

——ズリュニューウウウツ、ツプツ、ツププツツ……ブツツ、ズグチュウウウツ！

「くひいいいい——んっつっ!! あきゆうううっ、はふっ、はっ、んああああっ！」

鈍い音を響かせて肉の膜が引き裂かれ、息をするのも苦しくなるような野太い塊が膣肉を押し込んでくるといふのに、甘い喘ぎ声が治まってくれない。大の字に開いた身体はガクガクと激しい痙攣を見せつけ、身体中の汗腺からドツと粘っこい汗が噴き流れる。

触手を頬ばった口内には唾液が溜まり、膣壁からは蠟が溶けだしたように濃厚な淫液が

溢れだす。触手が膣道に埋没すると、押しだされた淫液は噴水のように水中へ広がり、辺りを泳ぐ魚達のエサになってゆく。

（あがはつ、はぎつ、ひつ……んらつ、らん、れへええ……こ、こにや、わ、らくひ……ひいつ、はひいいつ……）

身体の制御も心の制御も効かず、蕩けた膣粘膜を蹂躪されるたびに、絶頂の波が子宮の奥に突き抜けるようだった。瞳は泣き濡れていながらうつとりと微笑み、触手へ自然と口奉仕をしながら、尻や乳を舐められるたびに快感を覚えさせられる。

『トウゼンダ、オレノタイエキヲアレダケノミ、ヌリコンダノダ……モハヤキサマハ、オレニダカレネバマンゾクナドデキヌ、ミダラナハナヨメニナツタノダ』

「んひよつ、ひよつ、らつ……ころつ、はおおおおつつ！ おううつ、んふつ、ふぎゅううつつ!! んいつ、いひいいつつ！」

捻じ込まれた触手の先端がトグロを巻き、ズブンツツと蜜壺最奥を貫いた。喉からせり上がる吐き気と、下腹部を圧迫する不快感に眉をひそめた瞬間、半紙に落ちた墨汁のように、ジワァァ……と快楽の波が染み込んでくる。

（んぎつ、ひつ……うぐううつ、んつ、くつ……きひつ、き、つ……ふううんつつ！）

肉壺が引き裂かれんばかりの圧迫感だというのに、時乃の柔らかな粘膜襞は限界以上にその淫らな道を広げ、逆に触手を噛みしめながら奥へ誘い、快楽を引きだしているようだ

つた。ハムツ、グチュツ、ジュルウウウ……と咀嚼するようなはしたない水音を響かせ、そのたびに身体の内側から外に向け、切なすぎる肉悦が迸る。

「ふはうううつ、あうつ、んあうううつ！ はあつ、あおつ、あおおおつ……」

大の男の拳のような大きさになった触手が、抽挿を繰り返して肉壺を中からマッサージし、その動きにまたも絶頂を導かれてしまう。ビクビクと躍動し、全身を弓のように張り詰め、反り返らせた肉体は淫らな楽器となつて、牡欲をそその艶声を吐き続ける。

（ふあつ、あはあああ……んにやつ、にゃん、れひゆつ……ふつ、お、おなかの……んおつ、お、おくふつ……おきゆつ、かりやああ……あうつ、熱いのつ、れ、ひゆつ……）

ザワザワと背筋がわななき、子を為すための大切な部屋の奥が、熱く熱く震えていた。なにか大事なものがそこから溢れ、流れだす感覚が伝わりると同時に、触手の擦れる粘膜襞の感度はさらに増し、軽く引き抜かれるだけで、即座に二度も絶頂を味わわされる。

「はぐううううつつ！ おうううつ、んおつ、ふやああつつ……はひやつつ！」

これが、邪神の体液の効果なのか——そんなことを僅かに残った理性が考えるが、そんな思考もすぐに霧散してしまう。そして身体全体で、本能から伝わる快感に身を委ねたそのとき、時乃は身体の奥から溢れるこれがなんなのか、ようやく思い至つた。

（ひゃふつ、はふつ、はあああつつ！ こ、こえ、はああ……あうつ、んつ……そ、そお、いふつ……ころ、れひゆのお……はああつつ！）

ビククンツツと大きく震えた身体が、汗と涎と涙と、淫液とを問わず大量の液体を垂れ流し、全身がずぶ濡れになる。それらの液体をすべて肌塗りに塗りつけられ、グチョグチョと響く淫音に包まれながら、小さな巫女は牝の本能をその身で感じ取っていた。

（こ、へ……げ、げつけえ……れふ、わあ……んっ、んああっ！ わらくひの、お、おなかあ……子宮、は……排卵、ひて、まふうう……ひぐっ、んくあああっ！）

この宮殿に来て邪神の体液を浴び、塗りつけられ、その香りに頭の奥まで犯されながら、身体の奥まで丁寧な磨かれた——その忌まわしい儀式によつて、この身は邪神の花嫁として完成させられたらしい。いや、半魚の化身が言っていた言葉借りるなら——。

「な、なえ、ろこ……苗床、れひ、ら……ねえ……はふっ！」

邪神の子を数多と孕み、和津御様に差し向ける尖兵として生み落とす。それがこの城にかどわかされた自分に、強制される役割だったのだ。

「んぐふうっつ、んらっ、らめっ、らめへえええ……あふっ、はふっ……んじゅっ、じゅろおお……はぷっ、んれりゅっ、ちゆるうう……」

なにがだめなのか、それすらも理解できないほど快樂に塗り潰された頭は、押しつけられた触手を奉仕の対象と捉え、口が勝手に動いてペロペロとしゃぶつてしまう。

（はひゅっ、お、おひやえ、られませ……んっ、あっ……あぐっ、くるっ……き、きひや、ふうう……わらくひっ、は……はらんれ、ひまいまふうう……っっ♪）

ゴリゴリと最奥に先端を押しつけ、おへその裏側を苦しいくらい押し上げる、野太い触手の圧迫感に、子宮の奥がキュンと震える。ピツタリと狭まった肉壺は、擦れる触手の吸盤に内側から吸われ、挿挿されなくても肉が蕩けてしまうくらい、イキっぱなしの最高感度で躍動し、蜜液をダラダラと垂れ流す。

いまや時乃の身体は、邪神の触手を自らの伴侶と認め、完全に受胎の準備を始めてしまっていた。子宮は限界まで下がりきり、子宮口を広げて蜜液の噴出を待ち望んで先端を啜え、始まった排卵の感触までがはつきりと感じられている。

『ヨイアンバイダ……サアウケイレロ、サイシヨノコダ……ヨリツヨクハラメ……ッ』
 「くふううううんんっつ！んひっ、ひあぁっ、はらっ、らめっ、は……はりやむっ、はらんれっ、ひまいまふうううっ！あうっ、んおっ、ほおおおっつ！」

ジュルルルンツツと愛液の海を泳ぐように、勢いよく触手が引き戻された。その感触だけで獣じみた嬌声を轟かせ、時乃は全身をビクウウツツと張り詰めさせる。

そして、その直後――。

「ひぎゅううううっつ！あふっ、はふっ、んむふうううっつ！」

トプウツと濃厚な、ここに来てあれだけ馴染まされた邪神の体液が、膣壺の入口から奥にかけて、ビチャビチャと撒き散らされてゆく。そうして子種液の排泄を始めながら、一気に触手が蜜壺を駆け抜けた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>